

第4回「自立し合える社会へ」

平成14年7月13日(土)午後2時～4時
福祉センター学習・集会室

コーディネーター：長谷川貞夫氏 村山 利夫氏
話題提供者：西村 邦康氏 綾部 晴美氏
山下 一真氏 高崎 三男氏



市長挨拶

皆さんこんにちは。お出かけをいただきまして大変ありがとうございます。

きょうは「いっしょに話そう、まちづくりフォーラム」今年の4回目ということになるのですが、「自立し合える社会へ」というテーマになっております。いろいろな立場の人がみんなで、このまちの中で一緒に楽しく過ごしていけるような、そんなまちづくりをしていきたいという願いがありまして、そういうことからこのテーマを取り上げさせていただいて、きょうはぜひ皆さんとお話をしていきたいと思っております。

~~~~~

開催の趣旨・福生市の概要については、第1回と重複しますので、省略いたします。

~~~~~

これから後は、こちらにいらっしゃる皆さんが進めてくださいます。

御紹介申し上げます。こちらにいらっしゃるのが村山利夫さん、コーディネーターをさせていただきます。コーディネーターというのは、進行役とお考えいただいたらよろしいかと思います。

村山さんは福生にお生まれで福生にいらっしゃる方なのですが、カジマビジョンという映画会社で、カメラマンをされていて、最近プロデュースもされています。また、世界的な各種審査会の審査員を、

ドキュメンタリーの審査なんかをやっておられます。

それから、お隣にいらっしゃいますのは長谷川貞夫先生でございます、東京学芸大学の化学の先生です。自然化学の先生がこういった形でかかわっていただけるというのは非常に珍しいわけですが、自然化学の先生らしからぬ自然科学の先生ということで、大変いろいろとお力をいただいております。福生の教育委員会の委員をしておられます。このお二人にコーディネーターをきょうはお願いしております。

続きまして、話題提供者の方をご紹介します。最初は西村先生でございます。全体のお話をいただく中でいろいろと御指導をいただけるのではないかと思います。お隣は綾部晴美さんでございます。それからお隣が山下一真さん、高崎三男さんです。

それでは長谷川先生、よろしくお願いたします。

長谷川

御紹介にあずかりました長谷川でございます。

こんな形で気楽にやらせていただきたいと思います。本日この「自立し合える社会へ」というテーマをコーディネートすることを考えてくれと言われて、本は4～5冊読ませていただきました。それからインターネットで山ほど調べて、幾つか必要なものをプリントアウトしてございます。それから新聞記事もこの1、2ヶ月、こういったことに関係するようなことを一生懸命切り抜きました。付け焼刃でございますから、後で私達コーディネーターの発言の中にも、話題提供者の皆さんから見たら、この言葉の暴力があったりというようなことがあるかと思います。

あつていいのだと思います、きょうは、今後それがなくなるためのフォーラムなのだというふうに私たち自身考えています。すなわち、市の方でこういったプロジェクトがございまして、そして読ませていただきましたらバリアフリーについての、市としてハードについて、この建物はとてもすてきな建物ですし、多分それでも山下さんから見るとまた足りないところもあるのだとは思いますが、それでも私たち素人から見るととてもすばらしい、そういったハードについての状況については、さらなる改革についての提案等はあるわけですが、心の方については多分全くと言っていいぐらいないだろう。例えばこれは6月25日の朝日新聞に「心を病むってどんなこと。地域で語り始めた精神障害者た

ち」というようなことで記事が出ておりました。これはちょっと先を越されてしまったかな、私たちがもっと早くにやればよかったのかなというような感じがして、福生はやはり東京一進んだまちでありたいし、東京一ということは多分日本一だろう、日本一ということは東洋一で、東洋一だということは世界一だというふうに勝手に解釈していると、世界一いいまちになるための市民であろう、そんな気持ちできょうはやらせていただきたいと思います。

きょうのコーディネーター、二人ともこの件に関してはコーディネーターをすることをあまりよしとしてない。ただし雰囲気をつくること、それで終わるかもしれませんが、御協力をお願いいたします。

きょうは手話の方がお二人入ってございます。福生市手話奉仕員登録者の会の斉藤美佐子さん、そして丸山賀陽子さんのお二人、どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

このきょうのフォーラムを二つの部分に分けて、まず山下さんと西村さんにそして、山下さんには御自身の御経験を語ってくださって、皆さんへの提言をされたいとのこと。そして西村先生からは福祉でありますとか、保健でありますとか、医療に関して、地域でかかわってきた経験からお話いただく。まず第1のゾーンではそのような形で、そしてもう一つのゾーンでは綾部さんと高崎さんの方から、それぞれ親の立場ということからいろいろお話していただきたいと思っております。

それではまず、山下さんから御自由をお願いします。

山下

こんにちは。私は山下一真でございます。

今、養護学校の後輩達と一緒に「障害者とボランティアグループ友の会」というものをつくりまして活動をおこなっています。その中で私は一応代表をさせていただいております。

きょう話すのは私の体験談なのですが、この体験を聞いていただければということなのだなど皆さん御理解をいただけるのではないかと思います。

まず、私は福生に生まれながらも地元の学校には行っておりません。地元の幼稚園にも行ってないのです。中学校、高校、全然地元の人たちとはかかわり合っておりません。なぜでしょう。それは障害者だから養護学校に当時は行くのが当たり前とわかっていてからです。養護学校には確かに車いすの友だち、養護学校といってもいろいろあるのですけれども、私のような肢体不自由、東京都立村山養護学校、実は昭和48年に村山養護学校ができたのです。当時、その純一期生です。村山の歴史は私の歴史だと言っても過言ではありません。村山養護学校の基本の基本をつくったのが実は私たちのクラスなのです。

そういうことはあまり知られてないのです。なぜかと申しましたら、うちのクラスは個性が強いクラスでして、自慢ではないのですが、当時は養護学校

の建物というのは、計画はされたのだけれども建物というのはなかなか、工事の進みぐあいで、予定は未定なのですね。ですから48年ごろにできた小平養護学校の教室をちょこっと借りてしばらくの間そこにいたのです。突然全然わけのわからないままに連れられて「わっ、きれいな学校だな」と思って行ったのが村山養護学校の建物だったのです。

当時、初代校長先生が「一真君、おはよう」と言うのです。僕にしてみたら変なおじさんだと思ったのです。周りの子供たちも、なぜか知らないけれども生徒は少ないのですよ。当時は少なかったのですよ。だから初代校長は一人ひとりの名前を覚えてくれたのです。一真君、おはよう。何々君、おはよう。僕は変なおじさんだと思って、友だちが誘拐されると思いまして、ライダーキックをくらわしたのです。なぜそうなったかと申しましたら、小さいころに近所で遊ぶことというのはなかなか見つからなかったのですよ。どっちかというといじめられてしまう方なのですね。すごくいじめられました。でもいじめられてもちゃんとやり返しましたけれどもね。向こうは武器を持ってなくても、力では勝てないと思って僕は銀ピストルを持って追っかけたのです。そういう近所では、一真君は絶対逆境に負けない子なのです。

それが養護学校でも發揮されまして、どちらかといいますとね、勉強というのは皆さん1年生なら1年生の勉強をしますけれども、勉強を教わってないのです。養護学校というのは足の不自由な子には生活訓練みたいな感じで、このコップをこう持ってこうやって、こうやるのだよということを、手が不自由な子には、できる限りそれができるように、生活訓練ですね。例えばテーブルをふいたりとか、足をばたばた動かしたりとか、そういうことをやっていくものですから、教材というのはなかったわけです。

ですからその時間は退屈で、僕はその子たちを障害者だとは思っていませんでした。甘えているのだ、この子たちは。先生に甘えているのだ。僕も大人になれば、これは薬を飲んだらこの足が治るんだ、そう思っていた。ところが1年も過ぎると、みんな甘えているのではなくて俺と同じ病気なのだという自覚になってきました。小学校1年のときは授業を受けない。脱走をしてしまうのです。外へ行って遊んで、近所のおじさんとかおばさんがいろいろ教えてくれるものですから、それが勉強だったのです。先生は学校中僕を探すわけですよ。養護学校始まって以来と言っていました。先生の言うことを聞かないのはよくいる。でも脱走するやつはいない。近所のおじさんとかおばさんとかに、やさしそうなおじさんとかおばさんだとすぐ僕はわかるのです。あのおじさんはいいいおじさんだな。「ぼく、これをほしいのかい。お父さんでなければ買えないのだよ」「うん」「早く学校に戻りなさい。先生探しているよ」給食の時間になるとちゃっかり座っているのです。先生はこう言いました。「この子は何があっても生きていけるよ。12時の時間だけはしっかり覚えている。」

それで養護学校に行ってから大体僕は変わりました。友だちもケアする、助けてあげる、自分ができることは。だから面倒みが良過ぎてしまったのです。そのうちその友だちが大体上の先輩たちとけんかをし合うのです。そうすると僕はその友だちを守ってあげる、体を張って。そんなことをしているうちに友だち関係はできました。

でも、だんだん大きくなってくると自分の将来のことを考えてくるのです。それが問題なのです。養護学校というのは、障害者の専門的なことは僕にはわかりませんが、障害者の情報とか作業所の情報というのは、高校から大体進路実習が始まって、大体勉強でいろいろな作業所に行かされるのですけれども、作業所しかないのかな。障害者って普通の人と同じに働いてはいけないのかなと、だんだん思うようになってきて、なんでだろうと僕もいろいろ悩んできました。中学校の時からだいぶ悩み続けたのですよ。登校拒否をおこしました。大人は教えてくれないのです。どうしたらお父さんみたいに働けるの。どうして学校の勉強がこんなに僕にはできないの。いとこはできているじゃないか。障害者だから。それは大人の理由じゃないか。僕はお父さんみたいに働きたいんだ。会社で一生懸命働いて、健常者として働きたいんだ。それで学校に行けば先生がどうのこうの、また理屈が始まる。それでもう勉強しても追いつけないのだったら勉強なんかしに学校なんか行かない。おれはおれでおれの道を探す。小学校の脱走ではないけれども、もう学校へ行くことも嫌になってしまった。結局生徒会のことをやって、おれが会長をやって、文化祭の実行委員長も引き受けて、応援団長をやって、生徒会もやって、四つも五つも行事のたびに会長とか応援団長をやらされているから、本当にああおれは将来どうなっちゃうんだろうと思いますよ。頭の奥底でね。

ところがそのとき、真面目に僕に向き合ってくれる先生がいました。「そんなに一真、自分のことをしっかり考えられるのだから、おまえなら絶対やっていけるから、先生も応援するから、しっかり高校へ行きなさい。」高校へ行ってだんだんわかってきて、そこで一番の、本当にわがまま言って申しわけなかったとも思いつつも、その先生との出会いがなかったら僕はなかったと思うんですよ。

その先生に言ったんですよ。僕、勉強したいけど大学へ行けるかな。職業訓練校にしようかなあ。そして福祉の仕事をやりたい。障害者というのは差別される。そういうことで差別されても絶対それに立ち向かっていく人間だって必要じゃないですか。

だからおれは肢体不自由でありながらも高校のときにプロレスをやったのですよ。プロレス研究会を初めてつくったのですよ。今はほかの学校でもやられているみたいですが、多分日本では始めてだったと思います。プロレスをやりたい。先輩たちに自分に差別とか偏見とか、そういう部分に向かってくれ。そういうことでやったのですけれども、そのことに関して一つだけ言いたいのは、自殺する、自殺したい高校生がいたのです。たまたまタイガーマスクが私だったのですけれども、タイガー

マスクをやりました。プロレスというのは大人が見るものです。子供は見ないです。でもタイガーマスクと言ったらアニメの世界です。小さい小学校の子供も見ていますから、そのタイガーマスクを見ていてその子が、私負けられない。あの人も頑張っているから、僕も前向きに頑張るって、私も前向きに頑張っていく。それでその子が帰ったあと、僕は自主通学してましたから、たまたまその子に会ったのです、バス停でね。これこれこうなのだ、タイガーマスクに会わせてくださいと行って涙をこぼすのですよ。俺は第一号のファンができたと思ってる。自分ですよと言って、握手して、手を握って「頑張るとともに生きようね。ばかなこと考えてはいけませんよ。おれも頑張るから」「はい」その子は言いました。

世の中に出て一番困ったことは全く情報がないということでした。不安でした。就職ときは。何をどうしていいかわからなかったのですよ。ただ高校からすぐに社会に、企業に入ったんじゃないくて、職業訓練校的な用賀機能開発学院に入りました。そこは印刷の専門の学校で、僕はあまりできないのですよ。皆さんから見れば落ちこぼれみたいなもので、そこで教わったことというのは友情であるし、社会に出てそれに耐えられるような精神力ではないかと。君たちはここに入ったのだから、将来はいろいろな障害者とか先輩としてよき、いいモデルとしてしっかり地に足をつけていかなければならないということ、体でもって教わったのです。

ですから印刷ですから先輩、後輩は厳しいです。それと隣が自衛隊の訓練という学校もありまして、気合一辺倒なのです。体育会系の先輩たちがいるのです。そういうことで、自分もちょうど班長になったのです。やらせていただきまして、大変訓練は厳しかったです。なぜか知らないけれども、朝は毎日マラソンです。それと力仕事をやらなければならないから筋力トレーニングをやらされて、それでも世の中に出て役に立つなら、ということでそこを出まして、職安に行っても職がない。何ができるのか、何ができないのか自分でわからない。職安の人も困るし、自分も困る。名前だけ書いて登録してくださいと言ってもだめなのです。ですから一般募集のものから抜き取りまして、ここに行かせてくれ、ここに行かせてくれ。何百社受けても何百社受けてもダメなのです。受けるって面接で会ってくれるだけでいい方で、門前払いというのはざらですからね。ざらですよ。それでも頑張るってやるしかないのです。それで自分を売り込むのです。

面接のとき、今でも覚えています。給料は幾ら欲しいですか。幾らでも構いません。条件はありますか。座ってできる仕事です。何かほかにありますか。ボーナスどれくらい欲しいですか。ファイトマネーで結構です。ファイトマネーですよ。吉本興業はワンステージ400円です。それと同じなのです。僕の働きを見て決めてくれと言ったのです。給料なんか二の次三の次、もらえんと思っていませんからね。採用されたってもらえないかもしれない。使えない

かもしれない。だからおれの働きを見てくれ。おれを見てくれ。お願いします。「よし、入れ」といったままその会社が採ってくれたのです。そのとき給料をもらいましたけれども、涙が出ましたね。たった8万円ですけどね。辛かったですよ。雑用仕事でも進んでやった。いまだに言われるのが、山下君はどんなことをやってもへこたれないよな。泣き言ひとつ聞いたことがない。そこの社長が言うのですよ、二十歳ですよ。日曜出勤してくれ、何をしてくれ、女の話もしない。浮いた話はない。ぶつぶつ何も言わない。「はい、はい、やります、やります」。だから社長は「山下君は1年目か」「はい」、部長が「ちょっと調べてくれ。正社員にしてやれや。おれの周りの社員を説得してやるよ。山下君を見てみるよ。あんなに体が不自由で病気もしているのに、いつもここにこしている。おまえたちはどうだ。泣き言ばかり言いやがって、あの社員を見てみる。社員の鏡ではないか」と言われまして、僕が会社に出勤する前だったのですが、みんな拍手してくれた。あっおれはクビだと思いましたが。あれっクビだよ。おいおい次を探さなければいけないよと思ったら、そんなことはなかったのですけれどもね。

とにかく大変でしたよ。とにかく障害者というだけで、なんでこうなんだろうと。生まれつきの障害とかそんなものは関係ないのですね。杖をついていると、うちは通路狭いからとか。職安の人もはっきり言わないですね。障害がありますから会わないと。なんで断られたか僕は知りたいのです。なにがいけないんですか。行きますから、そこまで言うのですけれどもだめですね。

だけど今思ったら、当時あるところにうまく採用されましたけれど、全くわからなかったです。まず寸法がわからない。何センチ、何ミリ。足し算とか引き算とか掛け算とかいろいろあった。そこで、足し算、引き算できるのに掛け算がなぜできないのだといわれて、教わってないからですと言いました。そうしたら割り算とか掛け算とかその会社の人が教えてくれました。「お前、山下はのみこみ早いじゃないか、できるじゃないか」と初めて褒められたのです。教師以外の人に褒められたのは初めてですね。うれしくて、じゃあ俺、もしかしたら英語もできるのかもしれないと思って、英語もできるようになりましたよ。AだとかBだとかね。

とにかくそういったことをしながら、教わりながら、自分で何ができるかできないか全然わからない。養護学校がなければいいなと思った時期がありましたよ。でも医療的にそういうことが必要な人がいるかもしれないから、なくすということは無理かもしれない。でも今僕が言いたいのは、奪われたものを少しでもいいから、時間をかけてもいいから、人生全部をかけてもいいから、取り戻せたらいいなと思っているのです。それと皆さんと一緒に地帯に根付けるような世の中があればいい。いじめというのは健常者同士でもあるのですよ。昔から人間がこの地球に生きている限りいじめというのはなくならないと思うのですよ。偏見とか何かの拍子から始まるのでしょね。いじめられた方というのは

一生覚えているものですよね。いじめた方は忘れてる。何が言いたいかというと、いじめられる方も、度が過ぎてはいけないということですよ。

あと、障害者がまちの中にも、自分が何をしとあげられるだろうと思ってしまふかもしれないけれども、声をかけるだけでいいんですよ。アメリカ人が「エクスキューズミー」と言うのですよ、私が歩いていたら。何を言っているのだろう、一応返さなければいけないかなと思って、「ニコッ、ニコッ」とやるのですよ。私なんか一番びっくりしたのは、友だちと東京ドームに行ったときに、外人さんが私を見て、「ヘルプ」と言われるのかなんか言われるかなと思ってたときに、いきなりスマイルボーイと言われました。おまえはスマイルボーイだ、とてもすばらしいと言われたことがありましたけれども、そのぐらいに、日本人はないかもしれないけれども、「こんにちは」のあいさつから始めて、足が悪い、どうして悪いのかと思う前に、健常者の人がメガネをしている人、してない人っているじゃないですか。そういう感覚で足が悪いのだ、足が悪い人もいれば目の悪い人もいるのだ、そういうふうにいるのは勝手なのだけれども、だからと言って「こんにちは」というのが言えなくなって、ずっと行ってしまつてから、あっ言えばよかったかなと思う。でもあいづちでもいいと思うのですよね。そこから始まると思うのです。

その会社は、いまだに付き合いはありますけれども、辞めてもね。10何年前の話ですよ。25オのときにリストラされたのです。リストラされてという変だけれども、お前、仕事が無くなったからしばらく待機していてくれないか。しばらくして、おまえは体を鍛えてまたカムバックしてこいよと。俺はプロレスラーかと思いましたがけれどもね。しょうがないかと思ってね。そういうわけで今は、福祉の友だちと会ったりいろいろ仕事したりしているのですね。

これからも自分が生きていくということは、市の方にいろいろ皆さんから相談されたこと、あるいはこれから起きるであろうという問題を、僕たちも参加が少しでもできればいいなということと、こんな形にしたいな、あんな形にしたいなということは私なりに考えていることもありますけれども、それらを皆さんのお力を借りまして、希望していったらいいなと思います。

何か私に対して、養護学校でも、会社のことで、あるいは自分以外の心の病気の人の話でもいいですよ。僕は前の職場に心の病気の人がいました。行動とか言葉遣いを変えました。だけれども心の中はピュアでした。きれいでしたよ。

人間というのは初めて話さないとわからないかもしれない。人が変な行動した変なやつと思うかもしれない。声を聞いて変なやつと思うかもしれない。でもちゃんと向き合えば、会社の人だって、新人の僕の先生だって、まちの中に変な人がいても、変だなど思う前に社会が変なのかな、そうだ政治がおかしいのだ、それに比べたらこういうことはおかしく

ないやと思っていただければいいかなと思います。
それでは終わります。(拍手)

長谷川

どうもありがとうございます。山下さんの経験を含めて非常に短い時間、聞き入ってしまいました。20分間でしたけれども、生い立ちから、そして非常に盛りだくさんの内容を持っていました。

そこで、せっかくですから、数分間、彼に聞きたいこと、本当は20分間では語り尽くせないですね。時間は特に指定してないのですが、そうだろうということをごきちんとらえてくださってありがとうございます。どなたか何か御質問等ありましたらお願いしたいのですが、お願いいたします。お名前をおっしゃってお願いします。

Aさん

Aと申します。今、お話を聞きまして、障害者が普通の学校に行けなかったということが私もどうも合点がいかないのですよね。そんな時代があったのかなと、実は私も障害者なのです。これは普通学校に行きました。これは障害者として福生がそういうわけへだてをしたのか、ちょっと疑問に思いますが、その点ちょっとお答え願います。

山下

親から聞いた話なのですが、当時そういう一真君を入学させたらどうかという話をしてくれた人がいたようなのですが、とにかく学校で言うならば、この子を災害、火事とかそういうことがあった場合に、彼を救うために彼のクラスの40何人の生徒が犠牲になるのか、それとも40何人の生徒を助けるために一真君をほったらかしにできるのか、授業をやっている間、朝から最後まで、6時間なら6時間、8時間なら8時間、当時ですよ。お母さんがマンツーマンでやってくださいと、授業が遅れたら遅れた分だけマンツーマンでお母さんがあわせてくださいというふうに回答がきました。それで要するに校長先生とか教頭先生は養護学校というのがあるじゃないかというふうな感じでしたね。

長谷川

昭和54年に義務化ということで、要するに肢体不自由だけではなくいろいろな障害を持った方々が全員学校に行きなさいということ、そのときに明らかに分かれたという歴史があるのですが、それまでは各教育委員会、あるいは親の御判断でやっていたかと思います。私も詳しくは存知あげなくて、そういうことが54年に義務化されるときも、養護学校等に入れなければいけないのかということについては、特別ニーズ教育というふうに国はだんだん変わって、名前を障害者というふうに使わなくなっていますけれども、学問的にも、先ほどの健常者という言葉もだんだん使わなくなっていくのだと思いますけれども、健常者と一緒にやった方がよいのかということで、ただ山下さんの言われた中に大変示唆的な話があったと思うのです。それは山下

さんは肢体不自由であると、しかし要するに、全くありとあらゆることをちゃんと教われればそれは普通に行ける。しかし、そういったところが養護学校になかったということは、僕にとってもある種の驚きですね。障害者をひとつの大きなくりにしていたと、今、先ほど職業の話も出ていましたけれども、インターネットで見ましたら、たくさん会社はあるのですけれども、どういう障害の方を雇いますとかいうようなことまで、きちんとうたっている会社もあるようです。例えば上肢の障害、下肢障害、体感障害、視覚障害、聴覚障害、心臓障害、腎臓、直腸、小腸等というふうに変り多岐にわたって書いてあって、そういうふうにと考えると、先ほど山下さんが最後の方におっしゃっていた、足が悪い人を見たときにメガネをかけている人と一緒だと、目が悪いわけですから、そうすると今並んでいる中に、いわゆる腎臓障害だとかいうことと何ら変わらずに、やはり人間だれしも、そういう、これは障害者、これは障害者ではないという考えがだんだんおかしい世の中になってきているのかなと、そういうふうにはいけぬ世の中、また言うべきではないし、私たちはそう考えなければいけない。

ちょっと時間の都合があって、ほかの方もあるかと思いますが、続きまして西村先生よろしいでしょうか。

西村

西村です。自分の体験でいろいろなお話するつもりだったのですが、私自身は医者立場ということになりますけれど、客観的に見ていくということで、自分の体験談というのは余りないわけですね。障害者ということになりますと、それではどうなのだろう、実際に身体障害の方、あるいは知的障害の方、それから精神障害と、大きく障害者を分けると三つの分類になるわけです。身体障害の方には時折かわりあうことはあるのですけれども、知的障害の方、あるいは精神障害の方についてはかわりあうケースが非常に少ないですね。そうしますとなかなかそういうことを自分の体験談としてお話することは非常に困難だということです。大変失礼な言い方ですが。

ただ、日常の中で我々は医者という関わりからのいろいろな話はできます。例えばあそこの精神障害の方は入院させた方がいいのではないかと、と言ってもなかなか入院ができないと、できない理由に、入院するのも非常に困難性を伴うと、御本人の承諾がなければいけない、あとはいろいろ行政の方で何かしてくれないかというような問題はあります。すけれども、そこについては非常に難しい問題があるものですから、我々としてはそういう中に立ち入ることはできないということがあります。

ただ、耳の不自由な方などの場合ですと、きょうも手話の方がおられますけれども、たまたま私の知っている方でもそういう方がおられます。もう50幾つか、ちょっと忘れてしまったのですけれども、全然通じないですね。コミュニケーションをとろうと思っても全然ゼロなのです。ただこちらには

何か期待をして何かしてくれないかと言ってくるわけですね。こちらは表情、あるいは手振り素振り、ここが悪いのではないかというようなことを類推しながら処置をします。それが当たっていれば、ニヤッと笑って、ありがとうとは言いませんけども帰っていくと。そういうことを考えていきますと、今のこれだけ豊かな時代でよかったなと思いついて、そういう手話だとか、そういう障害者に対して小さいときからそういうような教育がなされていけば、その方もよかったですらうと思います。御家族の方は大変で、「西村先生、困ってしまったのですけれども、どうしたらいいかわかりません。東京の方の施設に入っていますけれども、時々帰ってきて、いろいろなところをふらふら歩いて困ります」というような話があると、戦後50何年経ってなおかつ昔は貧しかったのではないのかなと、そんなふうになっています。

きょうは「自立し合える社会へ」ということで、たまたま障害者ということと言いますと、障害者プランというのができましたね。平成7年12月にできて、平成14年までの7ヶ年で障害者プランをつくると、「ノーマライゼーション7ヶ年計画」というようなことでプランができています。

そういうことで、今言ったいろいろなモデルがあるわけですが、身障者の方についてはいろいろな問題があるでしょう。その中でもポイントとして、地域の中で共に生活するために、社会的自立を支援するために、バリアフリー化を促進するために、生活の質の向上を目指して、安全な暮らしを確保するために、心のバリアを取り除くために、我が国にふさわしい国際協力、国際交流というような、こんなタイトルを七つほど挙げて「ノーマライゼーション7ヶ年計画」というのが策定されています。

福生においても、たまたま私は西多摩医師会の副会長、会長をやっているところから、西多摩地域の医療計画策定委員とかいろいろなことにかかわりあっていて、病院の数とか、そんなことを何年かやっておりますけれども、たまたま私自身がそのとき参考になったのは、社協で約20年近くやっておりますときに、ある方が、今は相談員をやっていますけれども、地域の中でいろいろなことをやった方がいいのではないかと、逆のことを通して、地域の中の人たちのいろいろな付き合いをつくっていくと、そういうようなことを始めまして、牛浜の駅の近くのSさんと、それから私どもの部落でそういう地域活動というのをやりまして、表彰されたことがあるのですけれども、そういうようなことで、身近な中で、障害者までもいいかと思いますが、そういう方をサポートしていくということなんです。

たまたま去年だったですか、市長さんがそんな地域の中で盛り上げることによって福生の市はよくなるのだというお話を聞いて、これはいいことだなとつくづくそう思っております。そういうことを考えてみますと、障害者ということに限定して考えてみますと、僕の携わっているのでは脳卒中、あるいはそういうのかかっている方、あるいは交通事故

で具合が悪くなったとか、あるいはがんで具合が悪くなる、そういうことが、がんで具合が悪くなった方なんかでも、例えば若い27~8ですか、頸椎のがんで四肢麻痺を起こしてずっと寝たきりの方がいます。そういうような方々のずっと往診をして見ているわけですが、言葉が多少はしゃべれますが、十分ではない。ただ右手だけはよく動く。あとはぜんぜん動かない。お母さんが面倒を見ている。そういう方を往診してずっと見ていますと、この前たまたまあそこで、筋ジスの方が、名前をちょっと度忘れしてしまいましたけれども、市民会館で演奏しましたね。その方もパソコンを使っているのですね。たまたまそのCDをいただいたので、あげると言ったら結構喜んでくれたのですね。もう一人は、これは筋ジストロフィーで、50歳近い方で、パソコンだけはちょっと使えるということで、そのCDをあげたら大変喜ばれました。その方は自分自身では、余命幾ばくもないということは自覚をしているのですけれども、なにかを真剣にやってみたいと言いました。

そういうような難病の場合だと治療方法がはっきり言ってないのですね。いろんなことに対応することや、身体症状の変化に対応してやることはできますけれども、それを直してあげることができないのです。そういうことに対して、ある面では人として空しさを感じるということがございます。

そういうような方を支えられるような社会、バックグラウンドといいますか、家族だけではなくて、何かのときにはフォローしていけるような体制ができれば、大変ありがたいと思います。障害者の事柄というのは、先ほど市長さんがお話にも合併の問題がありましたが、そういうような福生だけでできること、あるいは福生と近々のものと一緒になってできるようなこと、そういうことを考えるようなシステムも僕は大変必要ではないかと思っております。

たまたまその筋ジスの方の体調が悪くなって、ちょっとおかしいから来てくれないかと言われて行きましたが、僕自身で勝手にいろいろなことをやるわけにいかないから、都立の神経病院に電話をして「こういう状況なので、指示があればそのとおりになりましょう」と言ったら、「では先生ちょっと救急車頼んで来てくれないか」ということですぐ救急車を呼んで入院させていただいたのですけれども、そういうようなときに受け入れ体制があるということは、僕自身には医療体系の中では大変ありがたいことだと、そんなふうになっています。

西多摩には難病の方をフォローしてくれる病院、確かに青梅にも神経内科はありますし、それからそういうようなベットもあるので、結局その人は、家族が具合が悪くなったときに受け入れてくれるということで、本人が具合が悪くなった場合ではだめなのですね。都立神経病院しかない。非常に苦労している。そういうことで大変難しい問題があって、そういうような医療保険の面からいいにしても、もう少しこの地域で考えてやるようなことが必要ではなかるうかと思っております。

それからあと、心の問題も出ましたけれども、これも大変重要な問題だと思います。精神の場合ですと、保健所の運営協議会なんかでよく話が出るのですけれども、そういう方を受け入れる方がいてくれて、そういうような話をしてやるのですけれども、なかなかスムーズにいかないと、やはりまだそこにバリアがあるということがあるのではなかならうかと思っております。

あと教育の話がございましたけれども、教育の話も近ごろはそういう話を聞かないことはございませんし、あとは住宅の問題ということが非常に大きな問題になっております。住宅の問題になりますと、これは、こういう席上で話すことがいいことかどうか分かりませんが、たまたま先日、鍋二に行きまして、健康教育をしてくれとあって、保健センターから言われましてお話をしたわけですけれども、たまたまずっと団地の中で脳梗塞を起こして、半身不随を起こした患者さんをずっと往診していたケースがあるのです。その方は車いすだったら動けるのです。どこでも行けるのです。行けるのだけれども、住んでいるところは4階、僕も正直言って往診するたびに4階まで足を運んでいくのはきついなと思うときもあるのです。眺めはいいけど、きれいな眺め、やはり西多摩はいいなと思うときはあるのですけれども、やはりきついのです。だから障害者にやりなさいよと言っても、なかなか車いすで下りることができませんで、エレベーターはないのです。ではヘルパーさんそれをやってくれと言っても、どうやって下りるか、非常に困難なのです。それでこの前もちょっと冷やかして、都知事にちゃんと言ったらどうかと。こういう状態ではおかしいのだと、せっかく公営住宅なのだからエレベーターの一つも付けてほしいと、そういう嘆願書を出したらどうですかと、そういう話を、変な言い方で申しわけないのですけれども、そんな話をして帰ったことがありますけれども、やはり住宅の面では非常に問題があると思います。

例えば隣の公団住宅、そこでもやはりここでなりましたね、肺気腫の方がおられたり、脳卒中の方もおられます。そういう方は、住んでいる場所が3階、4階になると、非常に狭い通路の階段を上がって、自分一人は絶対無理ですよ。ですから高齢化社会の中では、住宅というのは非常に重要な要素になるような気がします。

ですから、できればそういうようなところ、市の施策の中にもちゃんとそれは改善すると書いてありますけれども、現実の問題としてそういうものがあるならば、それをサポートしてあげるのも方法ではないか。都営住宅、新しくできたのがありますね。あそこに入る方にもちょっと往診で行ったのですけれども、あつぱらしいなと、ワンルームでこんなにきれいになって、これが全部できたら、これが高齢化社会の非常にいいものができるなど、ですから今まで古い30年代の建物でそういうものを何とか改善するような形を公団なり、あるいは都に申し入れていただければ大変いいのではないかなと、そんなふうに思って、自分自身の経験というよりも、

そういう往診を通して実際に見た中からお話いたしました。

一言、非常に嫌なことを言うふうになると思うのですが、前の基本計画のときにある方が言ったことは、福生は3段階に分かれていると。基地の段丘と、それから市役所を中心にした段丘、それから一番下の段丘、この三つがあると。それをどういうふうにやっていくのが一番いいかという話をされていて、つくづく僕自身もそう思っております。

だから障害者の方でも、ここのセンターに来るについては自分で車いすで来ることはできませんよね。まず不可能ですよ。だからそういうことを考えると、何らかの形でここにはスムーズに行けるような、せつかく福祉センターがあるのだから、スムーズに自分で車いすで行けるようなシステムをつくってあげた方がいいのではないかと。だから移送サービスは必要だと、いいと思いますよ。移送サービスは限られた問題ですから、これを自分で出て来るといったらそのような、福祉センターで来られるような何らかの方法を市役所で考えてくれたら、福生というのは住みやすい、いいまちになって、支え合う、自立し合えるまちになるのではないかと思っております。

非常にちぐはぐで、自分の経験がないのにこんなことを、えらそうなことを言って申しわけないと思っておりますが、これで終わらせていただきます。

ただ、お年寄りの福祉に関しては、こういう行政の方が非常に努力しているし、介護保険計画などは非常にきめ細かく、いろいろなものを取り入れてやってくれているので、いいものができてるのではないかと思っております。

以上で終わらせていただきます（拍手）

長谷川

ありがとうございました。続けてお話ししようと思うのですけれども、先ほど申しましたちょっと休憩を入れさせていただきます。

- 休 憩 -

長谷川

続けてお話を伺いたいと思います。時間の都合で、高崎さん、綾部さんのお話を伺った上で、皆さんからの御意見等を交わしたいと思います。

まず、高崎さんからお願いできますか。

高崎

ただいま御紹介にあずかりました高崎と申しします。

山下さん、それから西村先生のお話をいただいて、今度は私の場合、親の立場、子供がいますので、親の立場から少し話をさせていただきたいと思します。

私の子供は息子ですけれども、生まれつきの、先天性になりますけれども、脳性マヒによる四肢機能

マヒということで、足は完全に動きません。それから手の方は多少使えますけれども、実質的には障害者の程度でいえば1級の障害者です。

生まれたときからですので、気がついたのは生後6カ月、寝返りをうたないということで、診ていただいたらやはり脳性マヒということで、実質的にはどういう原因かということとはわからないということで、医学的にはそういうことで名前はついたのですけれども、実質的にはどんな症状でなったかというのは、これは生まれたときの、生まれる状態ですね。これがわからないとできないということで、そういうふうなことで名前だけはついたのですけれども、実質的な原因というのはわからないということでした。

親としてやはりすごいショックでした。これは健常者、それから障害者という言葉自体使うのは非常に、自分としては余り好きな言葉ではないのですけれども、これはバリアフリーの中からいったら区分けする、障害者だ、それから健常者だというその区分けするのが非常に嫌だったものですから、生まれたときには、しばらくたってからですけれども、やはり親の一線を越えなくてはいけないと、これは個性だと、本人にとっては、これは個性なのだということをおもうようになったのですね。

だれでも何かのぐあいではやはりハンディを持つことになりませぬ。年をとれば足が動かなくなる、それから耳が聞こえなくなる、それから目が見えなくなる、こういうふうなことも起きてきます。ただ本人はやはりそれが小さいときにそれが全部きてしまったのだという考え方を持つようになりました。そういう考え方を持つようになってから、一人の人間として見ていけるようになってきました。

幼稚園のときから、普通の幼稚園に入れるようにいろいろなところを当たりまして、加美平保育園のところでは何とか受け入れてもらえて、ハンディのない子供たちと一緒に踏みつけられながら、なぐられながらというふうな感じで、行って、卒業して、今度は小学校のことを考えました。小学校というと福生の中では第一小学校と、それから第二小学校ですが、特殊学級があります。

教育委員会の方からは最初何を言われたかという、一番最初に出たことは養護学校に行けと、とにかく養護学校に行けというふうなことが一番最初に出てきました。それに反発して、一番近い第六小学校に何と入れないかということですと交渉していたのですけれども、それが学校サイド、これは校長先生から、それから教頭から、それから一般の教育者からですね。その人たちの気持ちが一つにならない限り、普通の学校というのは受け入れはしてもらえなかったわけですね。やはり先生の負担が大き過ぎるという問題が大きくて、六小の方には受け入れさせてもらえませんでした。最終的にもう3月に入ってから第一小学校の特殊学級の方ですけれども、入れていただいたと、泣く泣く私たち親というのはやはり第一小学校の特殊学級に入ると、特殊学級という意味自体も、バリアフリーの言葉から言ったら非常に差別的な意味があると思ってい

ましたので、特殊学級に入ったら今度は普通の学級の方に通えないかと、特殊学級では何をやっているかと言ったら、勉強というのはやはりやらないわけですね。何をやっているかと言ったら、入って、みんなで遊んで、はいさようならというふうな。では一体6年間というのはその子に対してどういうふうな教育ができるのかと、多少なりともできるものであれば教育はさせてあげたいというのが親の立場、それから子供に対しても将来を考えるときに、何の教育も受けられなかったときに、そのまま出たときに、一体この子はどういうふうになるのだろうか、自立できるのかどうかというふうなところを問題にしたわけですね。

何とか小学校3年生ぐらいになってから、やっと普通学級の方で1時間なり2時間というのを受け入れてもらえるようになったと、そういうふうな過程を含めて行ったのですけれども、なかなか普通学級の方での生徒とのコミュニケーションというのが、非常に難しいわけですね。体が動かないということで移動の問題ですね。一小にしても二小にしても三小にしても、どこの小学校にしてもエレベーターはない。スロープはない。そうしますと肢体不自由の人というのは車いすで移動しなければいけないということで、非常に生徒に負担がかかって、先生にも負担がかかるということと、2年ぐらい普通学級に行きましたけれども、早くいえば崩しに行けなくなってしまったという問題も出てきました。

今度は中学校、第一中学校と第二中学校になりますね。第一中学校の方には特殊学級があります。第二中学校の方にはそういうふうなクラスがないから、一中の方に決めなさいと、もし行くのだったら一中の方に行きなさいと、ということは、私の家というのは福生の外れになります。ちょうど一中とは正反対の方向になりますので、約3キロぐらい距離的にはあるわけですね。そうしますと親が付かないと行けないという問題が出てきます。これも教育委員会とずっと話し合いで、3月ごろまで話し合っ、最終的には養護学校、村山養護学校ですけれども、当時は村山養護学校がこの辺の管轄になります。学校区になりますので、教育委員会はまず第一は村山養護学校でした。一中の話は出なかったですね。

村山養護学校、山下さんからも話をいただきましたけれども、勉強については普通の学校の約3分の1か、そのくらいの程度の時間ぐらいしか取ってないのではないかと、そういうふうなところがあります。一応能力にあわせてABCだとかそういうふうなランクに分けて勉強していたみたいですね。でもやはり学力としては本当の、よくできた子で中学校にしながら小学校ぐらいのところではないかと、中学校も3年養護学校に通って、どれだけ勉強したかちょっと私もわかりませんが、高校もやはり養護学校。養護学校というのはすごく温室的なところがあって、地域との密着型ではないですから、各いろいろなところから来て、クラスでは一緒になるけれども、そのあとばらばらにバスに乗って帰ってしまっ、地域に帰ってからも友だちがいないものですから何もできないのです。そうしますと一人で家

の中にいるか、それから親がついて周りをぐるぐる回っていても、異端児と言っておかしいですけども、こいつはどんなやつなのだと、この車いすに乗っている人間は一体何なのだと、異物を見るみたいな、慣れるまではすごく異物を見るような形で見られていました。それは精神的なバリアフリーに全然なっていないわけですね。というのは、なぜかというと、やはりその地区の学校にその人が入っていない限りは、見慣れないから一体どんなやつなのだというのがわからないと、ということで話しかけられないし、何もしない、そういうふうな状態が続いたわけです。

本人も養護学校を卒業してからは、一気に荒波にのまれるわけですね。世間の目というのはすごく厳しいわけですね。普通の人たちと、我々が外に出て社会に出たとしても、やはりすごく厳しい目で見られるわけですけども、それをさらにましてそういう何の免疫もない状態のところから、一気にそういうところに出されてしまうというのが現在の養護学校の状態ですね。ですから本人たちが社会に出て就職したいというふうな形をとったとしても、ほとんどが作業所とか、そうふうな同じような人たちが集まる場所では働けない、それが現状のところですね。

親としてもそれでは、これから、親は長生きするかと言ったら、子供より先に亡くなるのが当たり前という、長生きしたとしてもやはり自分の、本人が体が動かなくなるという状態が続くので、本人が自立しない限りは将来が心配になるということもありますので、本人がどれだけ、努力という言葉は非常に、本人に努力しろと言っても非常に苦しいと言われるところもあるのですけれども、ただハイディキャップを持っている人たちが普通の人たちに受け入れられるには、2倍も3倍もやって始めて普通の人たちと同じような見方をされるというのが現在の社会ですね。

私がいる会社でも、ハイディキャップを持っている人たちが働いていますけれども、やはりそういうふうな目で周りを見ています。本人が幾ら努力していると言って、100%やっていたとしても、周りから見たら本当の20%か30%ぐらいの能力しか見てないという、自分の子供がそういうふうなことがあるので、やはり自分の目も見方が違うのかなとは思うのですけれども、本人はすごく努力しているということで見えあげられるのですけれども、そういう人たちと接触がない人たち、気持ち的にすごい壁があって、その人たちを見る目というのはものすごく厳しい目ですけどもね。なんでこういう人たちを働かせているのだというふうなことが一番目に出てきます。本人は努力しているのですけれども、自分は本人なりに100%の努力をしています。それでも周りから見る目というのは壁があるためにやはりだめだと、削除するような形で見られるわけです。あ、こんなことで、自分の息子もそういうふうに見られているのかな、というふうな気持ちもあったのですけれども、本人はすごくいい人に、周りにぶつかったというのもありまして、小学校、

受け入れてくれた担任の先生もいた。それから中学校、高校、養護学校でしたけれども、その中においてもやはりいい先生にぶつかったとかということで、勉強についても意外と、ほかの子と同じように、ある程度のところの知識は得ることができた。卒業するときになって一つ問題になったのは、これからどうするかということがあったのですけれども、私もそうでしたけれども、親戚の者からも、将来、小学校のときから、これからの世の中というのはITとかパソコンの世の中になるから、本人が手が多少は動くというのであればパソコンを使えるから、パソコンの世界にいかせられるように勉強させたらどうかということがあったのです。私もそういうつもりでいました。

卒業する段階になってきたときに、ちょうど市の福祉課の方ですね。東京コローニーという肢体不自由の人たちだけに、パソコンの勉強をさせてくれるという学校があるというのですけれども、それは2年間勉強させてくれるという情報が、どういふわけか福生市の福祉課の方に情報が、その年だけだったので、情報が入りまして、息子の方に連絡がきて、それもとんとん拍子に、倍率が50倍ぐらいあったのですかね。うまいぐあいに作文で通って、第一位で通って、そういうことで何とか2年間勉強できました。

これもよかったなとは思ったのですが、やはり知らない人とよくコミュニケーションをとって、こういう方面に進めたいのだという話をしておいたのが、偶然に入ったその情報によって2年間勉強できたとか、それから卒業しても、その学校というのは肢体不自由の人たちの雇用に関しては非常に積極的に動いてくれて、卒業したからといってそれで終わりというふうなことにしない場所でしたので、1年間こちらのディサービスに通いながらいたのですが、あとその場所からはアルバイト的な、これをやってみないかとか、そういうふうな仕事をいただいて1年間、それから1年経って、その次に今度はまたハローワークではないのですけれども、そこそこには載ってはいなかったのですけれども、東京コローニーというところと連絡を取りあっている場所から、肢体不自由のパソコンをできる人を雇いたいからというふうな話があって、その後とんとん拍子に、何となしに決まってしまうと、今現在就職はしておりますけれども、本人も最初は在宅だったのがその会社まで行かなくてはいけないということで、今現在は福生の駅から拝島の駅まで電車通っています、一人で。

現在、福生の駅というのは、西口の方にエレベーターが一基しかないのです。本当は東口にも欲しいのですけれども、これは来年の10月以降でないとエレベーターは設置できないということも聞いておりますけれども、できればエレベーターもエスカレーターもですけども、足の悪い人たち、それから目の悪い人たち、やはり表示がはっきりしていないということで乗りにくいとかですね、それから慣れてないということで、エスカレーターの扱いが悪かったというのがあったのですけれども、やはり

通っている本人に聞くと、もうかれこれ1年勤めていますけれども、対応が早くなる。やはりこれはそういう人たちが外に出ないということがネックになっているのかなと、お年寄りにしてもそうですけれども、ほとんどが家の中で生活しているという、家族の方に負担がかかり過ぎるから外に出さないのだとかいうふうなことで、そこでもバリアがあるわけですね。これは手伝う人、それからそれを見ている人たちの、自分たちはすごい負担がかかっているのだという、見られる方もやはりすごい負担がかかっていると思うのですね。自分が動きたいのだけれども、言うとその人たちに迷惑がかかるからと、うちの息子なんかも最初言っていたのは、自分が動くといろいろな人に迷惑がかかるから、というふうなことが出ていたのですね。

それは迷惑ではないけれども、私も息子がそういうふうなこともありまして、運転ボランティアの方お手伝いさせていただくということで、いろいろな御家庭のところに行って、やはりお年寄りが「はいどうもありがとうございます。外に出られるというのは非常にうれしいです」これはいろいろなところにバリアがあったらそういう人たちも出られなかった。それから車いすで動いていても、ちょっとした段差ですね。本当の3センチ、それから5センチ、このくらい普通歩いている人には全然問題ない段差であっても、車いすの人たち、それから目の見えない人たち、そういう人たちにとってはすごいバリアになっているわけですね。

これはハード面になるかもしれませんが、精神的な面もそうですけれども、そういう外に出てもそういうバリアがものすごくあると。それでなかなか出られないと。

それから横断歩道にしてもそうですし、それから歩道にしても自転車がたくさん置いてあると、それで通路が狭いと、目の見えない人には自転車なんて全然見えないですから、目の見えない人はやはり点字みたいな形になっている、あのところで杖でついていって初めてこの線だというのがわかるのですけれども、それ上に自転車が出ていけばそれにぶつかってしまうという、そういう光景も見たこともあります。ただ、車いすの人たちにはこの点字というのは、今度はバリアになっているみたいですね。でこぼこしていますから、車いすが動かせないと、それは小さいお子さんをバギーに乗せて歩いている奥さんたちを見ても、やはり下ががたがたしたという状態で、小さな段になっているとやはりそこをつかかって、あぶなくつんのめりそうになってみたりとかいうのがありまして、そういう段ができないように、平らな状態で動けるようなことができないのかなということも以前に話していたことがあったのですけれども、市の方で非常に難しいというふうなことで言われたりしました。

バリアというと、精神的なものを今回多く出してほしいということがありましたけれども、ハードの面でもちょっとだけ話をさせていただいたということです。

親の気持ちとしたら、どうやったら自分の息子な

り娘なりとか、そういう人たちが個性と見ていただいて皆さんに受け入れていただけるかという、気楽な気持ちでこの人たちは個性だと見ていただいて話をするなり、それから接触していただきたいとは思っております。

これで私の話を終わらせていただきます。(拍手)

長谷川

教育、職業、社会、お子さんの年齢とともに、長年いろいろお考えになっていることをわずかな時間でおしゃべりいただきました。本当にありがとうございます。

続いて綾部さん、お願いいたします。

綾部

最後になりました。綾部と申します。

私、知的障害の子供を持っております。知的障害の親たちでつくっております、正式に言いますと「心身障害者児の手をつなぐ親の会」と言いまして、そういう子供たちを持った親たちが、手を取りあって頑張っていこうという、そういう会でございますが、その一応福生の会長をさせていただいております。

本当はそんな、なるようには思っていないんですけど、成り行きといいますが、ずるずるという感じで今現在経過しておりますけれども、うちの子供は今28歳になります。音武君の「五体不満足」という本、皆さんご存じだと思うのですが、あれとちょうど逆になります。体はとても丈夫で、元気で動いておりますが、知的に、昔で言うと精薄馬鹿とか、本当に知能のついていけない状況ですね。ですからぱっと見たときにどこが悪いのという感じなのです。ですからこういう言い方はよくないですが、体の不自由な方たちと、見た感じほかの方も、あぁ、あの方はどこもなく不自由なのだというのが、いい悪いは別にしまして認識されると思うのですが、知的障害ですとそれがちょっとわからないところがあって、どうしても世の中にわかっていただけないという部分で、親のジレンマが出てまいります。

ただ、本当に障害の軽い子ですと、本当にかわいそうだなと、普通にできて、普通のところに就職したりとかしたいのに、障害という部分でできないお子さんだっというらっしゃるのですよね。そういう方にはもっと門戸を広げていただけたらありがたいという思いはあるのですが、うちはちょっと低めの方です。IQ24、4歳程度、上中下でいきますと下の上です。でも中にはうちの子供を知っている方はいらっしゃると思うのですが、その程度だというふうに思わないのではないかなと思います。それは知能としては、教えても何してもわからないのですが、何回も学習することで生活していくのに必要な部分を身につけてきたという部分ですね。

先ほどのお二方のお話にもありましたが、うちも小さいときにちょっと寝返りが遅い、歩かない、おかしいなということから、ちょっと変じゃないかというところから始まって、市の相談に行ったり、そ

れから立川の児童相談所に行って、それで知的にちょっと遅れているみたいだからということで、普通のところは無理だろうということで、一般の幼稚園のところにも話し合いに行ったのですけれども、見る手がないから、一人きりにかかり切れないからと言われまして、立川児童相談所を経由して、今度なくなるというような話も聞いたのですが、昭島にあります生活実習所といって、そういう知的障害の、今は大人の、成年の方の通所の施設があるのですが、あそこ前は児童の施設でしたので、あちらに通っておりまして。

2年間行く予定でしたけれども、1年で、ちょっと言葉も出るから、お友だちみたいなものがつくれた方が逆に伸びるかもわからないから、普通の幼稚園を探してみたらどうですかと先生に言われまして、それで近隣の幼稚園を全部聞いて回ったけれども、さっき言ったように、結局先生も手いっぱい、そういう子が一人入ることによって、一人専任の先生を付けられないからということが多くて、今は各保育園に一人とか二人そういう子が入れようになっているのですね。ですから大体そういう特別なところに行かなくてもいいので、それでその児童部がなくなって成年の生活実習所というふうに変ったのですが、うちのころはまだそれがあったものなんです。やっとなんか探しまして、秋川、隣町のお寺さんでやっていた保育園、ちょうど先生も、その専門教育の先生も御主人が養護学校の先生をやっているという方で、理解があるということで、一応面接に行って、この子ならば何とか大丈夫、そんなに多動で飛び歩いたりするのがなかったものだから、受けていただいて、秋川まで1年通いました。電車と園のバスを利用していました。

それで学校に入る段階になったときに、家族で相談しましたが、普通の学校は多分無理だろうという、親の勝手な思いこみもあったのですが、でも学校の就学相談におきまして、その当時私も生活実習所の人に、養護学校と特殊学級があるということを知りましたし、見学も行きまして、どっちがいいか迷いましたけれども、親の考え方と、また先生方と、専門の見方の方の考え方と違うと思うから、とにかく相談をかけて、向こうが何というか、それを判断してからもう1回相談しましょうということで、その就学相談をうけまして、養護でなくても特殊の方でも大丈夫そうだからということで、うちはたまたま熊川の第五ゲートの真っ直ぐのあの線を境に向こうが第一小学校で、こちらの熊川地区が第二小学校、そこに特殊学級がございましたので、うちはその第二小学校の方に行きました。姉は学区が第三小学校ですから、姉は第三、弟は第二、全然別な、方向はまるきり逆なのです。娘に言われました。どうして一緒にじゃないの。説明はしましたけれども、まだ小さいときでしたから、姉は理解できてなかったみたいですし、3年生が4年生過ぎたころでしょうか。そのころ、あとになってからですけども、「私、弟がそういう子だと知ったのは後だったのよ。びっくりした。本当にショックだったのだからね」と後で言われましたけれども、別に親は隠していたとい

うつもりはありませんけれども、普段生活しているからわかっているかなと思ったのですけれども、やはりそういうことってわからないかなと、後で思った次第なのですけれどもね。そうなるとうちに一緒に住んでいてわからなかったら、よその人ってもっとわからないのではないかなということを感じました。

だからその当時やはり、自分の子供がそういうちょっと知能が足りないということで、余り外に出したくないという、人の目にさらしたくないというのは、母親はそれほどでもなかったのですが、家族にやはりありました。おじいちゃん、おばあちゃん、主人とかね。それからちょっと遠く離れていますけれども、私の実家の方も一緒に連れて歩くのはちょっと嫌なような、そういう雰囲気を感じました。正直言ってとてもショックでした。自分の親がそういう状態ならば人様なんかもっとじゃないかなって。でも結局家の中にこもっていてもしょうがありませんからね。連れて出すしかしようがないですよ。それで結局みんなにわかっていただいて、何かあったときに助けていただけるような状況をつくっていかねばいけないのではないかなと思ひまして、私はなるべく連れて歩きました。

うちの子は電車がとても好きなのです。車とか飛行機は余り興味を示さないのですが、電車がとても好きなので、電車に乗ってどこかいろいろ、どこへ行くのではなくただ電車に乗ってあちこち歩くというのを、それは現在も続いているのですが、そういうところで、見た目は何ともないのだけれども、しゃべると話し方がおかしいとか、話の内容がちょっと普通ではないとか、それから時々興奮して奇声を上げるとか、ホームで電車を待っていると、うちの子はちょっと上下に体を揺らすのです。ギタタンバタンという感じなのですが、そういうような変わった行動も起こします。そういうのを見るとあの子はなんか変だわというような雰囲気の中で周りは見ていますね。

今はもう私、気にしないようにしていますけれども、みなさん、人様から見られる感情を抱えていると思うのです。それを乗り越えて、結局それを気にしてばかりいると、本当に家の中にこもっているしかないのですよね。だからそこで開き直るといいますか、「もういいわ、見られても」という感情にならないと、子供を連れ出して歩くことはできないのです。

だから私なんかのグループの人みんなそういう経験はしています。そこでどこかで開き直って連れ出して、お互いにこういう仲間の人たちとのお母さん方や親御さんとのそういう仲間の中でお互いに「あなたもそうだったの」という、一種の癒し合いみたいな気分から、だんだん明るさを取り戻してきているのではないかなというふうに思います。今、みんなうちの会の人たちはとても明るいですし、元気一杯で、障害の子供を抱えているのに、自分はやよそのボランティアをやっている方とても多いのです。でも結局そういう経験から、皆さんそうやって表に出ていかれたと思うのです。

うちも小学校と中学校は特殊学級に行きました。地域のです。高校が羽村、もともとこの辺は知的障害は羽村になるのですね。今はちょっと秋川の方にもできまして、ちょっと区域がいろいろ分かれましてけれども、前は立川はずっと向こうの区域が逆でしたので、こちら、福生や羽村やこっち方面はみんな知的障害が羽村、それで肢体不自由が村山というふうな区分けになっていましたので、高等部から、そのころ就職なんかとても無理だろうと思ひまして、羽村養護の方に来ましたが、先ほどと同じです。勉強というのはこの学校、ずっと12年間ですか、机に向かって皆さんがやる勉強というのはやったことはありません。ほとんど生活訓練ですね。自分の身辺処理から、それから物を、うちの子はすぐ握力がなかったものですから、握力をつけることに費やしたりとか、ですから服の脱ぎ着とか、そういうものにも、結局指先に力がないとすぐできないものですから、そういう部分にすごい比重が置かれていますので、勉強というものは本当にやっていません。ですから字も読めません。アイウエオとかも書けませんし読めません。何もできません。

そういう部分では肢体不自由よりもっと重度というか、ある意味重度かなという部分はあります。ただ子供によって、興味を持つものが突出している人がいて、すごく漢字が読める人やら、鉄道のことがすごくわかって全部言える人やらとかいろいろあるのですね。だから、もうないものは無理にねだってもしょうがないから、その子が持っているもの、できるもの、興味を示すものを伸ばしてあげるしかないと思って、日々そういうところを努力しております。

時間がなくなってきましたので、うちの子は体が丈夫で走るのが好きなのですが、少し太りぎみなので、やせなければいけないからマラソンをさせたいのですが、親がついていけないのです。それで毎日歩くだけは、30分歩いております。でもね、雨が降っても、雪が降っても、台風でも行きたがるのです。これが困るのです。習慣づけるまでがとても大変なのですが、ついてしまうと今度は逆に崩せないのですね。これをわからせるのが大変だし、しょうがない、雨でも雪でも付き合っております。

だからそういうときに代わりに行ってくれる人がいたら助かるなという、すごくそういうことを思いますけれども、大体夜の時間ですし、ボランティアさんを頼むというわけにもいかない時間ですしね。

今まで地域の学校、養護学校と行ってきた感じでは、小学校のときに特殊学級があった学校のお子さんというのは、大きくなったときに僕一緒だったのだよとか、私一緒だったというのを、今、おもちゃ図書館、ここのセンターの中にありますけれども、行かせていただいていますけれども、声をかけてくださる方がいらっしゃるのですね。だから小さいことから、変にボランティアをすとかではなくて、一緒に関わっていくということがとても大事なのだなと思ひました。昔で言えば、下町のおうちみたいに隣近所の人を全部知っていて、何かあればちゃん

と助けてくれる、ああいうようなシステムみたいなものはとてもありがたいけれども、反面していただくには、うちの中のことや、私のことや、子供の状況をわかってないと、手を出す方もわからないと思うのですよね。だからちょっとわずらわしいと思う部分もありますけれども、助けてもらうにはやはり自分の方もそういうことを少ししてから、ボランティアというのは改めて構えるのではなく、そこにいるおじいちゃん、おばあちゃんがちょっと何かあったらばつと助けるように手を出していただく、逆に私たち障害を抱える親も自分でやらなければ、何でもするのではなく、連れ出してみる。中には結構抱え込んで、見せたくないから嫌だというふうにする親もいるのですけれども、それは一種の、障害を抱える親の方のバリアだと思ひます。

だから本当にバリアフリーになるには、両方がそういう部分で歩み寄って、それには頭で考えるのではなくて、小さいときから一緒になって行動していれば、そういうふうに変更して構えなくても、自然と身についてくるものではないかなというふうに思っています。

私事なのですが、きょう、ここに来るために子供は、けさ10時半からおもちゃ図書館にお弁当を持ってきております。月3回あるのを楽しみにして来ているのですが、3時半で終わりのですね。きょう、これは4時までですね。お願いしてくるのを全然忘れていたのです。気がつきまして、そうしたら大丈夫よ、ちゃんと見ているって、だれか帰ってくるまで待っていてくれると言ってくれたからって、本当にありがたいなと思ひました。ですからやはり、普段のお付き合いがとても大切なのだなと改めて感じた次第です。

どうもありがとうございました。(拍手)

長谷川

ありがとうございました。綾部さんと打ち合わせのときに、実はいくつかおっしゃっていただきました。知的障害者の場合は子供のときのサインがわからない、親でも。そういうケースが多いということ。そして先ほどお散歩に連れて出かけるというふうには、非常に辛い思いをなさった、世間にさらしてもよいという気持ちになる、それが親の転機であると、きょうも勇気を持っていろいろなお話を、私たちの心にお話をしてくださいました。

ここで全体的なお話ですが、村山さんからちょっとお願いいたします。

村山

せっかくでございますので、ちょっと私、感想を述べさせていただきたいのですが、一市民として参加させていただいて、本当はコーディネーターですから司会の進行役を務めなければいけないのですが、きょうは長谷川先生をお願いしてしまいました。

お話を伺って、山下さんは障害を持っておられる方として、それから高崎さんと綾部さんはお子さんをそういう形でお持ちになっておられる親として、直接こういう方々からお話を伺うことができる、し

かもまるで家族のような雰囲気の中でこういうお話を伺うことができたということは、非常に私にとってすばらしい機会であったというふうに思います。

山下さんの御体験を伺ったときに、当時の教育というシステムを判断された方々の中には、行政もあり、それから教育委員会もありであったにもかかわらず、ただ体に障害を持っているからといって一般の教育を受けることができなかったという判断をして、しかもそれが不満ながらも現実そういう形になってしまったということをお返ししてみますと、これは相当私たちもこれから真剣に、人が構成しているまちというものをこれから豊かにしていくためには、真剣に考えないといけないのだなと思いました。

これは役所の皆さんに私は行政に一石を投じることになるかもわかりませんが、専門のお立場として行政を進めていかれるわけですから、私たちはある種お任せしているところがあります。しかし、これからは任せきりではいけないのだと、つまり私たちも一緒にこの行政について判断をしていかなければいけないのだというふうに、山下さんのお話を伺ったときに貴重な体験談として私は伺いました。

それから、高崎さんと綾部さん、こういう会の中で堂々と、苦しい御経験を説明されたわけなのですけれども、「一人がみんなのために、みんなが一人のために」という言葉がありますが、みんなで一人をお助けすることができるという機会があるわけですので、そういう雰囲気をつくるためには、西村先生がおっしゃったように、心のバリアといいますが、人間はトータルしますと、私は今計算しましたら、平均寿命80年と計算しております。2万8000日ですね。1日1日貴重な経験をされた方が他界され、全然教育のない人が生まれてきているのです。つまり2万8000日経つと世代がガラッと変わるわけです。そうするとやはり毎日毎日、こういう教育というものが非常に重要であるということが感じられるわけです。

心のバリアというのは、恐らく一番大きいのは、いろいろな形の教育というものが非常に大事なのだと、これは学校の教育も社会の教育も家庭内の教育もそうだろうと思うのですが、こういうものが継続的に尽きることなく行われることによって、そういう社会が実現できてくるのではないかなと、そんな感じがしたわけです。

結論めいたことを申し上げて大変僭越なのですが、今までのいろいろなフォーラムに参加させていただきましたが、きょうほど手に汗握りお話を伺ったことはありませんでした。そういう意味では、本当に話題を提供していただきました4人の方々に感謝申し上げたいと思います。

長谷川

とてもいいお話だったのでこれで終わってしまいそうなのですが、フロアーの方からどなたか、時間の関係もあって制限がございますけれども、ど

たでも聞きしたい、あるいはお話ししてみたいということがございましたらぜひ。

きょうは年齢的な意味でのハンディキャップを持った人に対しての話はなかったのですけれども、そういったことでも結構です。ハードでなければ、お願いいたします。

Bさん

Bです。福生に越してくる前に、15～6年前に住んでいた市は、すごく福祉の面で進んでおりました。私は今、ボランティアの仕事と、あと介護保険制度の方でヘルパーの仕事と、仕事としては障害者さんの介護とか、そういう仕事をさせていただいているのですけれども、私自身がこういう子供たちを含めて参加するようになったのは、ちょうど昭和46年というのは一番ベビーブームで子供さんたちが多くて、一般の幼稚園に入る方も、一般の方もみんなはみ出された時期で、私たちは地域の、ここでいう田園会館のようなところを借りて、幼稚園に入れなかった方たちは、ともにお団子づくりとかやっていたいこうではないかということで、障害者もお年寄りもみんな手が空いた方が歩み寄って、まちづくりまではいかないのですけれども、団地の中で考える会をつくって、本当に専門の方がいまして、ずっと私もそういう方たちと携わって行く中で、今、子供たちがもう30才近くになっておりますけれども、地元にある福祉学園があったのです。地元で普通の小学校も中学校もあったのですけれども、子供たちも2～3歳からそういう障害の方も、いろいろな方と付き合いしていく中で、子供というのは本当に、先ほど言われましたように、個性ととらえていくのだなど知って、うちの子供が学校に入るときに、そういうところに参加してないお子さん、これは現実当たり前だと思うのですけれども、「変な子、変なおじいちゃん」とか、老人ホームもありましたので、だけどうちの子供たちは「なんで変なの」と、それはやはり3歳、4歳から家族ともども、そういうところに付き合ってきたからということで、小学校の中でも障害を持った方も見てきましたし、そういう中でずっと付き合いしていく中で、本当に地域の偏見というのは、親御さんもそうですし、私たちも学び、知っていくことが大切だなということを痛切に感じました。

その中で、どんな障害を持っていようと、お年寄りであろうが、健常者であろうが、今何を必要としているのか、昔よく私は、先ほど話題提供者の綾部さんが言われたように、私たちは小さいときは、本当にいろいろな方が、おばちゃんが助けてくれたり、本当にいろいろな方に入ってもらってきたのに、どうして54年度から分かれるかなと、私もこれは素朴な疑問でした。

だからこういうまちづくりフォーラム、広報とかいろいろなところに提供されているのですけれども、なかなか地域の方というのは、本当にやはり少ないというのが現実なので、これからもっともっと、いろいろな地域の会館もありますので、そういう地域ごとにも開催されていくことが、もっともっと福

生市のまちづくりが、これから高齢化社会を迎えるに当たって大切なことだと思います。

あと一つ感じたことは、行政と、ハンディキャップを持っている方と、それは私なんかに対してまた感じたことは、今、羽村にごみ処理施設に福祉風呂ができました。お風呂のセンターができましたね。あそこに正直言って私も何度もお手伝いで、車いすの方の介護に行きました。すごく行政の方などが、福祉風呂のことについて手取り足取り教えてくださったのですけれども、先ほど山下さんが言われたように、車いすの方も一応は皆さんと同じように入りたい、それで大変であれば福祉風呂の方に入ってもみたいと、でも最初から福祉風呂の方へどうぞといて案内される。私はだから、一応御本人の御意見を聞いて、そちらで1回やってみて、それで無理ならば福祉風呂でもいいのではないですかと、第三者的な立場でお願いさせていただいたのですけれども、そういう、今言われましたように、心のバリアというのがすごく、自分が仕事をしている人間として、またこれをやっている人間として、両方の間に入ると、そういうのがあります。

それからあと、先ほど綾部さんが言われたように、本当にいろいろな子供さんが大変なときに、より必要とするとき、そういうときに、本当に隣のおばちゃんやんが飛んで行けるような、24時間介護、お年よりも障害者も、また私たちもいつ目が悪くなったりするかわかりません。そういうふうな人たちが集えるような、介護保険の中で8時間ではなくて、24時間いつでも安心して、お母さんたちのために1日が使えるようなまちづくりができていけば最高な、ヨーロッパを抜けるようなまちづくりになるのではないかなと、そのためにも地域、地域でもっともっとこういうのを開催していただければありがたいかなと思います。

長谷川

ありがとうございました。ボランティア体験をなさっている立場からのお話でございました。まだまだ皆さん、あるいは今のお話をお聞きしたことで、いろいろとお伺いしたいのですが、時間の都合があります。またの再会を必ず市長にお願いして、私からの話はありません。きょうは聞いていただいた、それで十分です。（拍手）

市長

どうもありがとうございました。いろいろなお話を聞かせていただきましたけれども、私も一言もきょうは聞き漏らすまいという、非常な緊張感を持って話を聞かせていただきました。

これからこれをもとにしてスタートさせていただくということになるだろうと思います。

きょうの会の結果につきましては、記録を作成します。市民の皆さんにできるだけ大勢いろいろなことを知っていただくことが大事だと思います。そんなことを継続して次にステップアップしていければと思っています。

きょうはご出席いただきましてありがとうございます

いました。特にコーディネーターの長谷川さん、村山さん、それから西村先生、綾部さん、山下さん、高崎さん、大変すばらしいお話をありがとうございました。（拍手）

終了